

# モダリティと視点投射

西垣内 泰介

神戸松蔭女子学院大学 言語科学研究所

gauchi[at]shoin.ac.jp

---

## Modality and The Point-of-View Projections

Taisuke Nishigauchi

Shoin Institute for Linguistic Sciences, Kobe Shoin Women's University

### Abstract

モダリティは Nishigauchi (2014) の分析の中で中心的な位置を占めてきた視点投射と心的態度を表すという点で共通した特性を持っている。しかしモダリティは伝統的に「話者の」視点を表すと考えられており、視点投射のように文中の登場人物の視点を表す性質を持つかどうかについてはまとまった研究はないように思われる。

本稿では、この問題について、まず理由・因果を表す構文を中心に田村 (2013) の観察を参考にして考察し、「ので」と「から」の異なった性質を観察した。さらに、連体修飾節構造、「のに」を主要部とする構文にあらわれるモダリティと「自分」の束縛に関与する現象を考察した。因果関係を表す構文、連体修飾節では証拠性が中心となり、「意識焦点」が関与するが、「のに」の節には「基準クラス」の視点投射と共通する性質が見られ、「視点焦点」が関与する「自分」束縛の現象が観察された。

Modality is similar to the Point-of-View projections as described in Nishigauchi (2014) in that both express mental attitudes. However, while the POV projections can designate some sentence-internal protagonist's point of view, modality has been conventionally conceived of as representing the speaker's point of view exclusively.

However, modality is capable of expressing some sentence-internal protagonist's viewpoint, especially in constructions involving causal relations. From this perspective, we compare two causal connectives *node* and *kara*. While *node* readily allows the content of the clause to represent the perspective of a character in the

main clause, especially one identified as Sentient Focus, *kara* requires some specific conditions to be met for a non-speaker viewpoint to be expressed.

キーワード: モダリティ、視点投射、「自分」束縛、因果構文

Key Words: modality, POV projections, reflexive *zibun*, causal constructions

## 1. カテゴリーとしての「視点」とモダリティ

Nishigauchi (2014) の中心テーマである視点投射は、話者ないし文中の登場人物の心的態度を表す表現であるという点で、モダリティと通じるところが多い。

益岡 (2007) はモダリティは文構成にかかわるカテゴリーであるとし、「構成的主観表現」と位置づけ、それに対して視点(われわれの視点投射)は特定の位置を持たない「非構成的主観表現」としている。しかし、Nishigauchi (2014) の分析で、視点=POV は Infl システムの構成の中で特定の位置を占める、多層構造をなす機能範疇(の集合)であり、このような構造的な観点からモダリティと区別されるものではない。

我々の研究では、構造的にはモダリティは時制と同等ないし上位の構造位置を占め、視点投射は時制より下位にあると考える。たとえば、「そう(だ)」には証拠性を示す視点投射としてはたらくものと、「伝聞」をあらわすモダリティに属するものがある。「雨が降ったそうだ」は時制より構造的に上位であり、「伝聞」のモダリティを表すのに対し、「雨が降りそうだ(った)」は時制より下位を占め、「証拠性」の視点投射である表現である。Cinque (1995) のモダリティのシステムでは、伝統的にモダリティと呼ばれているカテゴリーを Mode と呼んでいる。

Nishigauchi (2014) の分析の立場では文構成上の位置をともに持つ視点投射とモダリティは明確に区別されるものなのか、むしろ Cinque (1995) の意味での Modal のようにより大きな構造上の範疇があってそこに視点投射とモダリティが属しているのか、2つのクラスを区別・比較する理論的・実証的な研究が必要である。

## 2. モダリティの「視点」

Nishigauchi (2014) の分析の中で「視点投射」をなすと考えている言語表現は、話者に加えて文中の登場人物の心的態度(意識クラス)や位置・方向性(基準クラス)を表すものである。それに対し、モダリティは伝統的に「話し手の態度」(益岡, 2007)を表すものと考えられ、話し手(のみ)の視点を表現するものと見なされている、というより私の知る限り、モダリティに属する言語表現が話し手以外の視点を表すかという問題についてはまとまった考察がない。

しかし、田村 (2013) による次の例文(第2章 (68a), (69b)) はモーダルの助動詞を副詞節に用いたとき、話者ではなく主文の主語の視点、判断を表しているという解釈が可能である。(田村 (2013) の (69b) は主文の主語が空代名詞で1人称を指すが、本論の文脈では話し手以外の登場人物の視点を表すことができるかが問題なので、主語に「健」を加えた。)

- (1) a. アクセルペダルが故障したかも知れないので、健は車を路肩に停めた。  
 b. 雨が降った { かもしれない / かもしれなかった } ので、健は川遊びに行くのをやめた。

(1a) では、健が「アクセルペダルが故障したかも知れない」と判断し、その判断が理由となって彼が車を停めた と解釈するのが普通である。(1b) も同様。

このことと呼応して、次の例が示すようにモーダル助動詞を理由節に含む文で、「自分」を主文主語を先行詞として読むことが可能である。

- (2) 主催者が自分<sub>i</sub>をきらっている  $\left\{ \begin{array}{l} \text{かもしれない} \\ \text{にちがいない} \\ \text{ような} \end{array} \right\}$  ので、タカシ<sub>i</sub>はパーティを欠席した。

これらの文では、タカシの「主催者が僕をきらっているかもしれない、にちがいない、ようだ」という意識によって彼がパーティを欠席したと解釈できる。

同じ理由を表す節でも、次の文では「自分」の先行詞を文内にもとめるのは難しいと思われる。

- (3) \*主催者が自分<sub>i</sub>をきらっているだろう  $\left\{ \begin{array}{l} \text{から} \\ \text{*ので} \end{array} \right\}$ 、タカシ<sub>i</sub>はパーティを欠席した。

文全体に付けた \* は指定された「自分」の解釈ができないことを示し、「ので」に付けた \* はモーダル助動詞「だろう」が「から」と共起できないことを表している。<sup>1</sup>

(2) では、文のかたちとしては「ので」のかわりに「から」を用いることができるが、その場合「自分」の主文主語を先行詞とする読みは容認性がさがる。

- (4) ?\* 主催者が自分<sub>i</sub>をきらっている  $\left\{ \begin{array}{l} \text{かもしれない} \\ \text{にちがいない} \\ \text{ようだ} \end{array} \right\}$  から、タカシ<sub>i</sub>はパーティを欠席した。

<sup>1</sup>Takubo (2009) は、モーダル助動詞を次の 2 タイプにわけ、条件文でのスコープなどの特性によって区別している。

- (i) 認識モーダル (epistemic modals) (「だろう」クラス)  
 だろう、はずだ、にちがいない、かもしれない  
 証拠性モーダル (evidential modals) (「ようだ」クラス)  
 ようだ、らしい、そうだ (伝聞)

Takubo (2009) の分析では、「だろう」クラスは条件文の帰結部分のみをスコープにとるのに対し、「ようだ」クラスでは条件文の前提部分もスコープに入る。

- (ii) a. 公定歩合が下がれば、景気がよくなるだろう。  
 b. 公定歩合が下がれば、景気がよくなるようだ。

この区別は、(2)–(3) の差異には対応していない。(2) には「だろう」クラスと「ようだ」クラスがともに入っている。

同じ理由を表す表現でも「ので」はモーダルを含む節に文中の登場人物の視点を含むことができるが、「から」ではそれができないという一般化ができるようだ。

益岡 田窪 (1989, pp. 170–171) は、『ので』は、あたえられた事態の性質から、一般的知識として導き出すことのできる、別の事態や行動の基準を述べるのに使う」のに対し、「から」は「行動・決定・判断の理由や根拠を表す」としている。「ので」には「証拠性」が本質的にそなわっているということだが、次の田村 (2013) による例では、「から」節の内容が主文主語の視点を表していると読むことができる。

- (5) 先生がおこる (かも知れない / にちがいない)  $\left\{ \begin{array}{l} \text{から} \\ \text{ので} \end{array} \right\}$ 、学生たちは静かにした。

この文では、学生たちが「(静かにしないと) 先生がおこる」と意識していると理解することができる。田村 (2013) は、岩崎 (1994) を引用しながら、(5) のような文を「観察の因果構文」と呼んでいる。主節の主語がノデ節、カラ節内の事態を観察し、その観察を理由にして主節で述べられる行動をとっている、というのがこの構文の意味的特徴である。

岩崎 (1994) は、「観察の因果構文」が成立する条件として次の3点をあげている。

- (6) a. ノデ節、カラ節内の述語が、過程を持つ働きを表す動詞である。  
b. 従属節と主節の主語が異なる。  
c. 主節の主語が無生物ではない。

われわれの観点から言うと、(6c) は主節の主語が視点を持つには無生物ではダメということで、(6b) はことがらの観察をするためには観察対象を表す従属節の内容は主節の主語以外の行動でなければならない。(6a) は、観察の対象となるためには事態に変化などの「過程」がないといけないということである。(5) の場合なら「先生がおこっていない」→「先生がおこっている」という変化が観察の対象となる。

この考え方は、(3), (4) で主文の主語が「自分」の先行詞になれないことを説明するのに大きな助けとなる。「きらっている」という述語は状態を表し、「過程」を表して観察の対象となるという資格を満たしていないのである。そこで、状態を表す「きらっている」を変化の過程を表す「きらいになる」にかえてみると、容認性がいくぶん上がると思われる。

- (7) ?主催者が自分<sub>i</sub>をきらいになる  $\left\{ \begin{array}{l} \text{だろう} \\ \text{かもしれない} \\ \text{にちがいない} \\ \text{ようだ} \end{array} \right\}$  から、タカシ<sub>i</sub>はパーティを欠席した。

次のように「から」節の述語を明確に行動を表す表現にすると、はっきりと容認性の高い文となる。

- (8) 主催者が自分<sub>i</sub>にスピーチを強要する  $\left\{ \begin{array}{l} \text{だろう} \\ \text{かもしれない} \\ \text{にちがいない} \\ \text{ようだ} \end{array} \right\}$  から、タカシ<sub>i</sub>はパーティを

欠席した。

このように、同じ理由や因果関係を表現する文でも、「ので」は「証拠性」を含んでいるので話者以外の文中の登場人物がモダリティを含む節の内容に対する「視点保持者」となることを許すが、「から」は「根拠」を表し本来は話者の判断を表現するが、岩崎 (1994) が指摘する「観察の因果構文」の条件が整えば話者以外の視点を表すことが可能になるという一般化ができる。

「観察」という概念は、Speas (2004) が証拠性投射の指定部の「視点保持者」を「目撃者」(Witness) とよんだのに通じるものがあるが、ここで見てきた例文に関していうと、「観察」ということが中心と考えるのが適切なのか、疑問を感じたくない。「観察」というのは実際に起こっている（と認識される）ことがらについてするのが少なくとも基本だが、(5) などでは「先生がおこる」ということが実際に起こるかどうかはあまり重要でなく、従って潜在的にでも「観察できるか」ということが文の性質を決定する重要な要因かどうか疑問である。

むしろ重要と思われるのは、(5) の場合「学生がうるさくすれば、先生がおこる（にちがいない、かもしれない）」という推論があつて、それを理由ないし根拠として「(先生がおこることを防ぐために) 学生が静かにした」、一般的に言うときのような定式化ができるものと考えられる。

- (9) X が起こる なら Y が起こる (かもしれない、にちがいない)  $\left\{ \begin{array}{l} \text{ので} \\ \text{から} \end{array} \right\}$  (Y が起こらなくするために) Z をした。

このように考えると、(6) の、従属節が「過程を表す」という要件も、「Y が起こる」というのは  $\neg Y \leadsto Y$  という変化を表すので、そこから派生すると考えられる。(3), (4) の「きらっている」はこの観点から排除され、(7) の「きらいになる」は容認される。

このような因果を表す構文は、英語の *lest, for fear (that)* で導かれる構文に通じるものがあるのではないだろうか。例えば (5) は英語で次のように表現できる。

- (10)  $\left\{ \begin{array}{l} \text{Lest} \\ \text{For fear that} \end{array} \right\}$  the teacher  $\left\{ \begin{array}{l} \text{should} \\ \text{might} \end{array} \right\}$  get mad, the students kept from making fuss.

英語のテキストでは、このような文は「先生がおこつてはいけないので」などと訳すが、それが (9) の後半の表すところである。

また、岩崎 (1994) が指摘する当該の構文が成立する条件 (6) の「主語が無生物であつてはならない」は不十分で、Nishigauchi (2014) の分析でいう「意識焦点」という概念が必要であると思われる。たとえば次の文を考えてみよう。

- (11) \*親が自分<sub>i</sub>をしかるかもしれないので、タカシ<sub>i</sub>はぐっすり眠っている。

夜更かしをしていると親が自分をしかるかもしれないという考えが理由となってタカシは早く就寝したのだが、この文の発話時点ではタカシは眠っていて「意識焦点」として認定できないことがこの文で「タカシ」を「自分」の先行詞と解釈できないことの理由である。もちろん、「タカシ」を「意識焦点」と読めるように主節の内容を変えると、「自分」の解釈は問題なくなる。

- (12) 親が自分<sub>i</sub>をしかるかもしれないので、タカシ<sub>i</sub>は早くベッドにはいった。

このように、モダリティを明示する節は話者だけでなく文中の登場人物の視点を表しうることを見てきたのだが、この節の議論での観察だけでは、「モダリティじたいが文中の登場人物の視点を表すか」という問いには答えられていない。これまでの議論が示しているのは、「ので」は証拠性を本来的にそなえているために問題の特性があると考えられることができるということである。「ので」じたいがその投射の指定部に「目撃者」(Witness)の役割を持つ pro を投射することも考えられる。これは Tenny (2006) の「ので」についての考えを Nishigauchi (2014) の分析のフォーマットを用いた表示と考えられる。

- (13) [<sub>Evid0P</sub> pro [<sub>ModalP</sub> ... Modal] ので<sub>Evid0</sub>]

ModalP の指定部にも pro が投射すると考えれば、上位の「ので」の投射（下位の視点投射と区別するために Evid0 とよぶ）によってその指標が決定されると考えられる。

「から」については ModalP 内部の意味的な特性、田村 (2013)、岩崎 (1994) が「観察の因果構文」とよんでいるものに言及しなければならないが、どのようなメカニズムが関わるか、ここで展開している統語的な分析が関与できるものか、今後の研究の課題である。

### 3. 他の構文でのモダリティ

モダリティを含みうる他の構文の中で、連体修飾節と「のに」で導かれる節を見てみよう。

#### 3.1 連体修飾節

まず、連体修飾節を見てみる。連体修飾節は、Kuroda (1973)、Tenny (2006) が証拠性領域を形成すると考えている。実際、次のような例文を考えることができる。

- (14) タカシ<sub>i</sub>は自分<sub>i</sub>を支持するにちがいない委員と握手した。

この例ではタカシが「この委員が僕を支持してくれるにちがいない」という意識を持っていると考えられ、Nishigauchi (2014) の分析が予測するように「自分」の解釈も指標で表示されているとおりに可能である。また、証拠性領域であることから、Nishigauchi (2014) の分析ではここに含まれるコントロールは「意識焦点」をさがすもので、「有意識条件」



に従うと予測される。関係節の目的語をとる文で、関係節内の内容に主語の指示対象が意識していない文を考えるのは容易ではないが、次の文はどうだろう。

(15)?\*タカシ<sub>i</sub>はマリが自分<sub>i</sub>を撮ったにちがいない写真をなくしたらしい。

この文では「自分」の先行詞が「マリ」である解釈が支配的で、「タカシ」が「マリが僕の写真を撮ったにちがいない」と意識しているという解釈はむずかしい。関係節内のモダリティは話者の視点を表すという解釈が支配的である。そして、それと呼応して「自分」を「タカシ」を先行詞とする読みも得にくくなると思われる。

### 3.2 「のに」

逆接の意味を持つ「のに」は証拠性とは違った性質を持っているようである。まず、次の文のように「有意識条件」に従う文は容易に考えることができる。

(16) マリが自分<sub>i</sub>を待っているかもしれないのに、タカシ<sub>i</sub>はわざと遅れて出て行った。

この文では「タカシ」が「マリが僕を待っているかもしれない」という意識を持っており、「自分」の解釈も「タカシ」を先行詞とすることができる。

興味深いのは、「のに」を含む構文は次のように「有意識条件」に従わないにもかかわらず「自分」を主文の主語を先行詞として読むことができるということである。

(17) マリが自分<sub>i</sub>を待っているかもしれないのに、タカシ<sub>i</sub>は家でぐっすり眠っていた。

この文で特に注目が必要なのは、「タカシ」は「マリが僕を待っているかもしれない」という意識を持っているとは考えられず、むしろモダリティの「かもしれない」は話者の視点を表している。この文で「タカシ」が「自分」の先行詞になれるのは、「のに」の持っているある側面によって「タカシ」を「視点焦点」と認定できるからで、「のに」には「ダイクシス」ないし「受益」の投射と通じる性質があるということである。いわば「視点の分裂」ともいえる現象が起こっているのだが、「意識焦点」＝「話者」、「視点焦点」＝「タカシ」と異なった次元でそれが起こっていることに注目するべきである。

「のに」を「基準」(Axis)の投射と考え、関与する構造と指標を表示すると次のようなものになる。

(18) [<sub>AxisP</sub> pro<sub>i</sub> [<sub>ModalP</sub> pro ... 自分<sub>i</sub> ... Modal] のに<sub>Axis</sub>]

モーダルの投射の指定部に現れる pro が「意識クラス」であるとする、第??章で見た、pro の指標の受け継ぎは「意識クラス」から「基準クラス」へ起こり、その逆はないという一般化とは矛盾しない現象と言える。しかし、それは前章までに考察した視点投射の中で意識クラスの投射が基準クラスの投射より上位の位置を占めているということがあったからで、(18)ではそれが逆転している。また、ここでの「自分」の束縛はモダリティの投射をこえて起こっており、それがなぜ可能なのか、現時点では確かなことを言うことはできない。

#### 4. まとめ

モダリティはNishigauchi (2014) の分析の中で中心的な位置を占めてきた視点投射と心的態度を表すという点で共通した特性を持っている。しかしモダリティは伝統的に「話者の」視点を表すと考えられており、視点投射のように文中の登場人物の視点を表す性質を持つかどうかについてはまとまった研究はないように思われる。

本節では、この問題について、まず理由・因果を表す構文を中心に田村 (2013) の観察を参考にして考察し、「ので」と「から」の異なった性質を観察した。さらに、連体修飾節構造、「のに」を主要部とする構文にあらわれるモダリティと「自分」の束縛に関与する現象を考察した。因果関係を表す構文、連体修飾節では証拠性が中心となり、「意識焦点」が関与するが、「のに」の節には「基準クラス」の視点投射と共通する性質が見られ、「視点焦点」が関与する「自分」束縛の現象が観察された。

#### 参考文献

- Cinque, Guglielmo (1995). *Adverbs and Functional Heads: A Cross-Linguistic Perspective*. Oxford University Press.
- 岩崎卓 (1994). ノデ節、カラ節のテンスについて—従属節事態後続型のルノデ/ルカラ—. 『国語学』, **179**, 103–114.
- Kuroda, S.-Y. (1973). On Kuno's Direct Discourse Analysis of the Japanese Reflexive *Zibun*. *Papers in Japanese Linguistics*, **2**, 136–147.
- 益岡隆志 (2007). 『日本語モダリティ探求』. くろしお出版, 東京.
- 益岡隆志 田窪行則 (1989). 『基礎日本語文法』. くろしお出版, 東京.
- Nishigauchi, Taisuke (2014). Reflexive Binding: Awareness and Empathy from a Syntactic Point of View. *Journal of East Asian Linguistics*, **23**.
- Speas, Margaret (2004). Evidentiality, Logophoricity and the Syntactic Representation of Pragmatic Features. *Lingua*, **114.3**, 255–276.
- Takubo, Yukinori (2009). Conditional modality: Two types of modal auxiliaries in Japanese. In Pizziconi, B. & Kizu, M. (Eds.), *Japanese Modality: Exploring its Scope and Interpretation*, pp. 150–182. Palgrave Macmillan, London.
- 田村早苗 (2013). 『認識視点と因果—日本語理由表現と時制の研究』. くろしお出版, 東京.
- Tenny, Carol L. (2006). Evidentiality, Experiencers, and the Syntax of Sentience in Japanese. *Journal of East Asian Linguistics*, **15**, 245–288.

**Author's web site:** <http://banjo.shoin.ac.jp/~gauchi/>

(受付日: 2014.1.10)